



2020年（令和2年）
6月号（No. 901）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

グレート・ヒマラヤ・トラバース(上) カンチやジャヌーを道連れに

松田宏也

創立120周年記念事業の一環であるグレート・ヒマラヤ・トラバース（GHT）の第1回踏査は、東ネパールのジャヌーやカンチエンジウンガの展望トレッキングからスタートした。53日間に及ぶ山旅のレポートを、かつて中国のミニヤ・コンカで「奇跡の生還」を果たした松田会員に、2回にわたって綴っていただく。

グレート・ヒマラヤ・トラバースは、創立120周年記念事業の一つとなる、壮大なプロジェクトである。諸先輩たちが挑戦したネパール、インド、パキスタンの高峰の山麓を6年間にわたり踏査、地域の環境変遷調査と探検的登山の実践をしようという試みである。踏査距離はカンチエンジウンガからK2まで約5000kmに及ぶ。私はその圧倒的なスケール感に惹

かれ、「直感」で参加を決めた。会社をリタイア後は千葉支部の仲間と登り続けてきたが、もうひと味何かが足りない。楽しく山を続けていくはずなのに、下山し、山を想うたびに、私の山登りはこれだけいいのだろうかと思うようになってきた。それは、このままだと何か大切な忘れ物をしたまま生きていく人生になるような感じ。そんなとき、私の心のジグソー・

パズルのすき間にGHTのピースがぴたりと収まりそうな「直感」を感じたのである。私は自分の「直感」を信じることにした。

目次

グレート・ヒマラヤ・トラバース(上)	
カンチやジャヌーを道連れに …… 1	
女ひとりドルポ越冬記	
極寒の中、122日間の滞在で見たもの、感じたこと …… 5	
支部長が代わりました …… 8	
コロナ禍でイベントが軒並み中止、延期に …… 9	
回想のマカルー —南東稜初登攀から50年を振り返って— …… 10	
東西南北 …… 13	
活動報告 医療委員会 …… 14	
図書紹介 …… 15	
新入会員 …… 15	
図書受入報告 …… 17	
会務報告 …… 18	
ルーム日誌 …… 18	
会員異動 …… 18	
編集後記 …… 19	

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

次々と噴出する不安

私は1982(昭和57)年、ミニヤ・コンカ(7556m)での遭難で九死に一生を得たものの、代償として両手指・両下腿を失った。手指はかろうじて両親指が半分残ったが、両足は膝下15cmから失い、義足の生活となった。

これまでに義足で多くの山に登った。冬山はもちろん、スキーも楽しむようになった。95年にはシヤパンマ(8027m)に遠征し、最終キャンプ(7430m)まで登った。8000m峰とはいえず、トレースが見事についており、義足

には登りやすい山だった。

しかしながら、義足登山を始めて36年近くになるが、いまでも義足との接触面の皮膚に傷をつくり、苦労するときがある。言ってみれば靴ズレのようなものだが、泣きたくなるほど痛い。痛くて痛くてまともに歩けないこともある。上りは比較的歩きやすいが、ガラ場は注意が必要だ。特に下りは転ばないように一步一步に神経を遣うので、疲労困憊となる。また、体重が一気に掛かるので、足への負担が大きい。

そんな身体で53日間のGHT計画が全うでき得るのか？ 不安が次から次へと噴出する。果たして、私には参加資格があるのだろうか……。

ヒマラヤ百戦錬磨の重廣恒夫さ

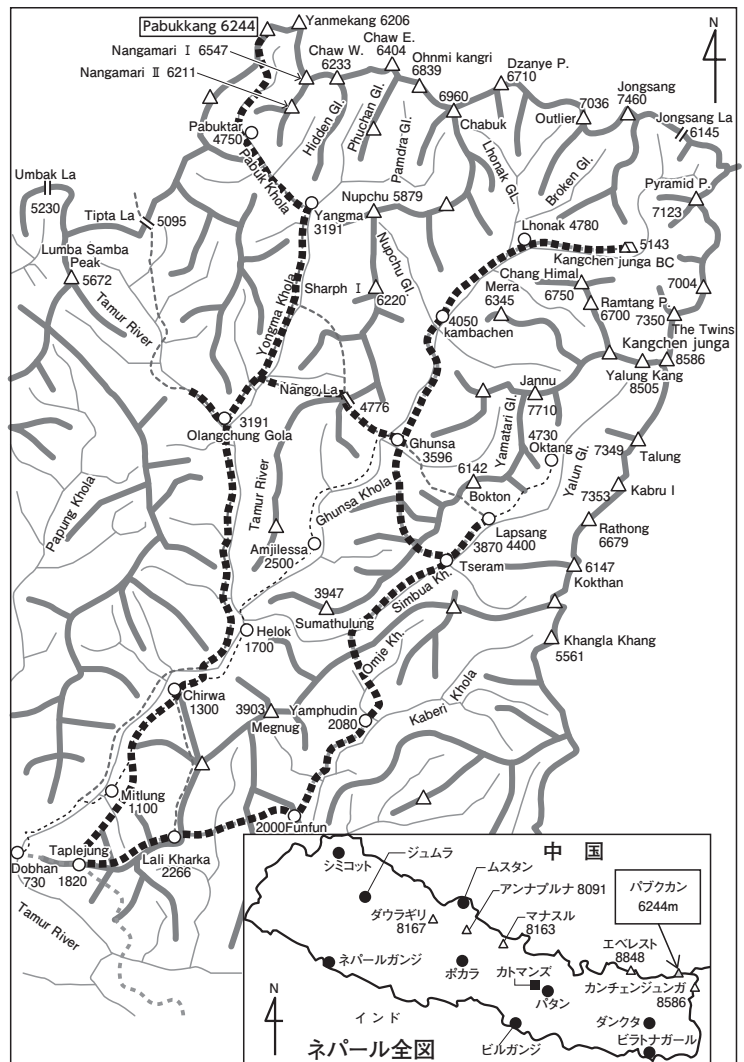
んが一緒であることに少しは安堵するものの、なんとかなるやろうという楽観と、本当に大丈夫なのかという不安がせめぎ合う。一抹の不安は消えることなく、浮いた沈んだりを繰り返す。

けれども、53日間の山旅には、その不安を凌ぐ喜びがあるはずだとの想いが、背中を強く押してくれる。今までの義足登山の経験とグレート・ヒマラヤが与えてくれ

る喜びの力、後は計画完遂の強い意志さえ持てば、この長い道中をもしかしたら歩き通せるのではなからうか……。

そんなとき、妻曰く「64歳の修行の旅に行つてらっしゃい！」

そうだよなあ、まさにGHTは私にとって修行そのものなんだろうと、妻の言葉に妙に納得する。後は自分の可能性を信じ、この山旅を心から楽しむだけだ。



タブレジュンから第一歩

2月29日、ソウル経由でネパールへ。

3月7日、カンチェンジュンガ山群への玄関口であるタブレジュンから、義足のグレート・ヒマラヤ・トラバースの第一歩を踏み出した。初日、急坂に沿って連なる民家の間を縫うように石段や畑道を進む。ときには車道を横切り、上り下りを繰り返す。雨の中をラリ・カルカのバツティ(茶店)に到着。美人の女将と子どもが迎えてくれた。

翌日は山腹を巻く車道歩きから始まった。車道を外れ、滑りやすい急な石段を慎重に下り切ると、工事の橋のそばに飯場らしきものがあつた。飯場で昼食を済ませ尾根の急登を30分。その後はだら

だらと畑道と車道を交互に上りながらカンデ・バンジャンに着いた。足の具合は順調かと思われたが、情けないことに、はや行動2日目に右足の断端部分に水泡(魚の浮き袋に水を入れたようなもの)を2つもつくってしまった。化膿止めを塗り、自然に水が抜けるのを待つことに。経験上、明日の朝には水が抜けるはずだ。義足と断端がフィットせず、緩いためにこすれて水泡ができてしまったようだ。固定のバンドを調整、緩みを抑え明日に備えた。気にしても仕様がな。夕方からはトンパ(シコクビエの発酵酒)を飲み、気分転換。

9日ブンペ・ダンダく10日シエルパ・ガオンく11日ラシア・バンジヤンく12日トロンディン

水泡ができたからといって、歩くことをやめるわけにはいかない。うまく手当てをし、痛みをそらしながら、ただひたすらショックを掛けないよう静かに歩く。

シエルパ・ガオンからラシア・バンジヤンは1300mの上りとなる。毎日8〜10時間の行動で疲れもたまってくるが、春を告げるミツマタやサクラソウ? に癒さ

れながら、だんだん奥地に入っていく感覚が嬉しい。食事はバツテイでとったが小屋が狭いため、今回初めてのテント泊となった。

ラシア・バンジャンからトロンディンは、大崩壊地に雪が多く残っていた。下りにフィックス・ロープを張った。もちろん、私が張ったのではない。私はハーネス装着にも時間が掛かる。細々した作業はお言葉に甘えて、ヘルプを素直に受け入れるのが得策というものだ。自分を過信し、ヘルプを遠慮することは大きな失敗を招くことにもなる。

13日ツエラム〜14日(同地休養)〜 15日ラムゼー〜16日ツエラム

トロンディンからは川沿いの歩きやすい石畳だ。大きなシャクナゲの林を過ぎ、徐々に高度を稼ぐ。今日は800mの上り。そろそろかな、と思うところにヘリポートのあるツエラムに着いた。若い女性2人が切り盛りしている。綺麗なテールとイス、夕食はダルバート(豆とご飯の定食)と思っていたら、驚くことにオムライスではないか！ ケチャップ、コショウ、さらにナプキンまで置いてある。な

んとも贅沢で、幸せな気分になる。ヒマラヤの三ツ星レストランとは、ちと言い過ぎか？ トンバは標高とともに250から400RSと値上がりしてきたが、まあ三ツ星ゆえに仕方なろう。疲れた体にお湯のお代わりをして飲むトンバは、皆のお気に入りとなった。標高が上がり(3870m)、冷え込みが一段と厳しくなってきた。夕食後には雪が降り始めた。

休養日明けは、カンチェンジュンガ南面が展望できるラムゼー(4580m)に、ヤク糞を避けながら我々3人分のテントが設営された。テントを荷揚げしてくれたポーターたちはツエラムに下りたので、この日は3人だけの静かな夜だ。テントから顔を出せば、満天の星にうつとり。

翌日はカンチェンジュンガ南面の展望地に向かう。展望地では、84年カンチェンジュンガ縦走の話を当事者である重廣さんから、山を目前にしながらかうことができた。36年も前に計画され、実行された8000m峰の縦走……。当時の岳人たちの、半端ない情熱に思いを馳せながらツエラムへの道を下った。

17日セレレ・キャンプ〜18日グンサ〜19日(同地休養)

今日の行程は長いことから、6時にツエラムを出発した。小屋の裏手からいきなり標高差1000mの急登が始まる。急登が落ち着くと、山腹を巻きながら徐々に高度を上げていく。シニオン・ラあたりからは雪が出てきたので、タイト・ロープで慎重に進む。ジャヌー(現・クンバカルナ)の好展望地であるミルギン・ラは、残念ながらガスっており展望なし。

北側の下り急斜面からは残雪が多くなってきた。膝から腰、場所によっては胸近くまでありズボズボと歩きづらいことこの上ない。



松田隊員の足を治療する重廣“ドクター” トロンディンにて



ラムゼー展望台からカンチェンジュンガ南面を望む

ストックも埋まるのでバランスが取れず、私は尻もちをついてばかりだ。セレレ・ラに着くころには陽が沈みかけた。今日の宿のセレレ・キャンプまではまだまだ。ヘッドランプを点けて、雪に足を取られながらも懸命に下りていくが、なかなか進まない。焦りが出始めたころ、闇の中にポーターたちの迎えの明りが見えてきた。

熱く甘いミルクティが疲れを癒してくれる。でも、まだここから宿まで1時間半は掛かるとのこと。

「まだあんの？」とがっくりであるが仕方ない。気を取り直し、何も考えずにヘッドランプの明りに照らされる山道をとにかく歩く。



ツェラムを出発、雪の中ミルギン・ラを目指す

やつとの思いでセレレ・キャンブの宿に着いたのは、23時に近かった。なんと17時間の行動であった。とにかく疲れた。クタクタ飯は喉を通りそうもないので、ミルクティをたつぷり飲んでシユラフに潜り込んだ。それにしても、よく歩いたもんだ。自分ながら感心してしまった。

昨夜はぐっすり眠れて目覚めが良い。疲れが取れているようだ。天気も良く、気持ちのいい朝だ。今日は通信もできる、大きな村のグンサまでだ。8時にセレレ・キャンブを出発。峠からグンサに下りる沢筋には雪が多く残り、腐った雪に足を取られる。そのたびに尻

もちをつき、ヨイショと起き上がる。何度か繰り返しているうちにグンサの台地に着き、ミルクティを持参したポーターと合流した。

20日カンパチェン〜21日ローナク〜22日ローナク〜カンチェンジュンガBC往復〜23日カンパチェン
今日からはカンチェンジュンガ北面BCを往復し、5日後にグンサに戻る予定だ。

昨夜の雪でグンサは白一色となった。村からは左岸沿いの歩きやすい水平道だ。見上げると左岸には連続する屏風のように岩壁が立ちだかっている。仙人が修行したという大岩から樹林帯を抜け、崩壊地のガラ場を過ぎると立派な吊り橋に着く。吊り橋を渡り、少し行くと怪峰ジャヌーが見えたが、すぐに雲に隠れてしまった。村の入り口の門をくぐるとカンパチェンの新しいロッジはもうすぐだ。ローナクまでは右岸沿いに大崩落地を越えていく。無人小屋のあるラムタンで昼食。180度に広がる紺碧の大空間の麓から岩壁、雪壁、氷壁、懸垂氷河、ヒマラヤ巒をまとった巨峰がにぎつと立ち並ぶ様は、圧巻のひとつである。

22日はカンチェンジュンガ北面BCまでの往復である。標高は5000mラインを突破する。歩きやすい平原を過ぎ、ガラ場や泥壁を越え、平坦地で休憩をとるが、どうも体が重い。力がいまいち入らない、頭痛も少し感じる。過去の高所経験でも、5000mラインで同様の経験をしたことがある。後1時間ほどでBCだが、復路もあるので無理は禁物である。重廣さん、吉井さんを見送り、私とポーター2人は、ひと足お先にここから引き返すことにした。ローナクに戻ると頭痛は治まった。

24日グンサ〜25日(同日休養)

グンサへ下る途中、ラジオ放送で東京オリピック・パラリンピック延期と、ネパール全土にロックダウンが発令されたことを知った。コロナ感染者がアメリカ、イタリア、スペインで何十万人とのニュースを聞いても、

ピンとこない。コロナで世界中がひっくり返っているとは露知らず、なんだかSF映画の宣伝を聞いているようだった。

グンサを後に、我々は計画どおり踏査とチベット国境の未踏峰アタックに向かうが、世の中が大混乱の事態になったことを実感するのは3週間後、タブレジュンに到着してからであった。(次号に続く)

(千葉支部長)



カンパチェンのロッジから見た夕映えのジャヌー(クンパカルナ)

REPORT

女ひとりドルポ越冬記

極寒の中、122日間の滞在で見たもの、感じたこと

稲葉 香

私は美容師のかたわら、1997（平成9）年から旅に出るライフ・スタイルを続けている。そして、旅の延長で山と出会った。18歳でリウマチが発病し、山に登ることなど想像もできなかったが、ヒマラヤ・トレッキングで大地の力に目覚め、山を登れるまでに復活する。再発と復活の繰り返しの中、河口慧海師という人物に惚れ込んで、その足跡を追い続けている。特に2007年、西北ネパール登山隊（隊長＝大西保氏）の遠征参加をきっかけに、西ネパールに通い始める。ここでは2019年11月～20年3月の、ドルポ越冬122日間の記録の一部を報告させていただく。

冬のドルポの生活を体感したい

ドルポはネパールの北西部に位置し、東西南北どこから入ろうとも5000mの峠を越えないと入れない地域で、標高約4300mまで村が点在する。私は雪が降り

積もる前に入域する越冬計画を立てた。これまで2007～16年の間に、4度にわたってドルポ内部を横断した。それは夏から秋にかけてのベスト・シーズンで、夏は高山植物であふれ、秋の収穫時には黄金色に輝く大麦畑に目を奪われる。さらに、樹木が少ないドルポにも紅葉があり、赤色の草が山肌を染め、そこに太陽の光が射すと色を感じるほどの美しさに驚き、思わず足が止まる。

ところで冬、この地はどうなっているのか？ 厳しい環境の中、厳冬の生活はどうしているのか？ 気になって仕方がなかった。自分自身で体感したい。込み上げてくる想いを止められず、その3年後の19年、ようやく決心ができて計画を実行したのである。越冬期間は3ヶ月になると見込んで、燃料、食料の手配をする。冬の生活は完全に閉ざされてしまうので、私が入ることで現地に負担を掛けないようにしたいと思い、しっか

り準備をした。実際、16年の横断中、越冬したいという話をしたとき、「食料を持って来たら泊まっていたいよ」と言ってくれた僧侶がいた。私はそのひと言にすべてが詰まっていると感じ、燃料や食料は現地では購入しないようにしたいと思った。

これまでのドルポ遠征で知り合った現地の人に直接連絡を取り、燃料とお米のデポ、そして、越冬拠点から出発地点へポーターを呼ぶ依頼をする。ところが、直前の9月にすべてが一度白紙になる。そんなとき知人のドルポ遠征が決まり、私の越冬地点を通過するということ、その隊が私の荷物200kg（灯油、食料など）の荷揚げキャラバンを引き受けてくれた。とてもありがたかった。

なぜデポをしたかというと、実際に私がドルポ入りするときは冬の始まりで、馬は無理だし、人々が降りる時期にたくさんさんのポーターが見付かるのか？ と思ったからだ。さらに越冬中、動ける範囲で動きたいと思っていて、その間はポーターは雇えない（経費削減のため）。できるだけ各村にデポをして、自分が動くとき軽量にする

ためだった。

極寒の中、五体投地に圧倒される

まず、ドルポの何が知りたいか質問のリストを作り、出会う人ごとに通訳のガイドを通して聞いていく。しかし、初端からガイドに注意される。いきなり色々と聞き過ぎたようだ。それで、どうしたらいいのか分からなくなり、戸惑ってしまう。

今回持参した『ヒマラヤ巡礼』（デイヴィット・スネルグロウヴ著、吉永定雄訳）という本の中に、目に止まった言葉があった。「常に大切なのは、じっくり落ち着いた観察とせつかに知ることを急



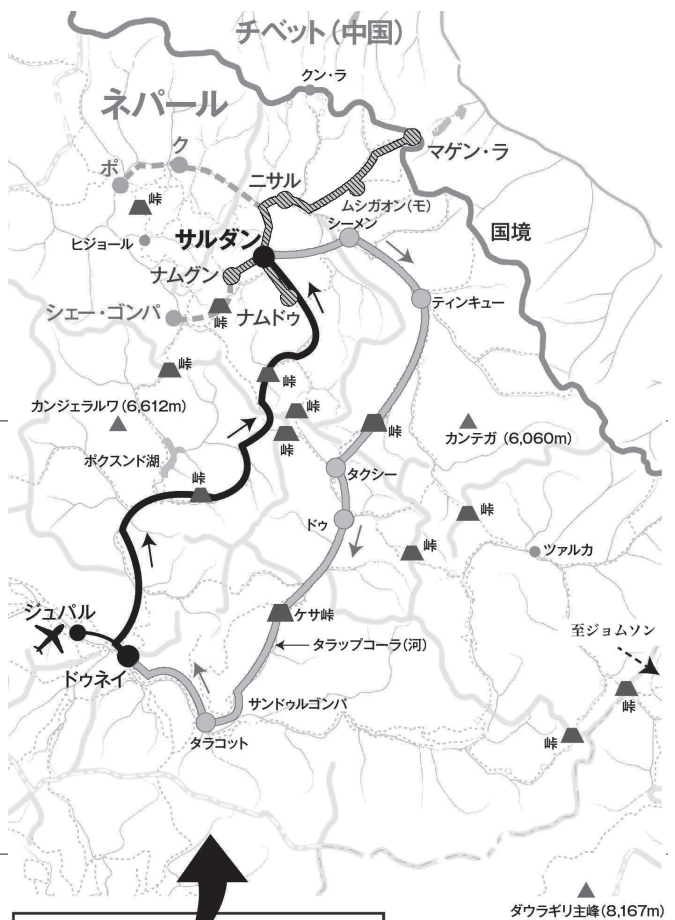
今回の越冬の拠点となったサルダン村

がないことだろう」と書いてあった。これは辺境地での心構えだと実感し、焦りがなくなった。

知りたいのは地元冬の生活だ。お金のある人たちは暖かい地域、カトマンズやインドに行くと言うが、越冬している人は想像以上にいた。質問リストは42個となり、その中で一番印象に残ったのは、サルダン村の冬のプジャ(法要)。3日間にわたって催されたが、凄く風がきつく寒い日だったのに、外で五体投地が行なわれていた。極

寒の中、靴を脱ぎ、両手、両膝、額を大地になげ伏して、全身全霊で祈り続ける。それも日が沈む直前まで。その姿に私は圧倒され、祈りの深さを感じた。

そのとき、ふと思ひ出したことがある。私が初めてチベット文化圏に行った、16年前のカイラス巡礼のときだ。「信じる力が人を美しく、強くさせる」と。今回も同じことを思った。正直、服はほこりまみれで、体は洗わない、着替えることもほぼないのに、私には美



—— 入域ルート
 —— 越冬中の移動ルート
 —— 下山ルート

があつた私の心に物凄く響いて、一瞬にしてすべてを吹っ飛ばしてくれた。

時代が急速に変わつた今、辺境地の変貌は驚くほどに速い。でも、祈る世界は変わっていない。それがとても嬉しくなり、感謝の想いが湧いてくるほどだった。と同時に、彼らは今、この時代の流れをどう思っているのだろうか？とも思った。

今回、まず「何を祈っているの？」と聞くと、村、家族、畑のこ

しく見えた。なぜなら、う!?と日々過ごしていたら、あるとき分かつた。内側から湧き出てくる美しさや強さだ。これだ、これが本物だ。当時、迷い

と、そして皆の幸せと言った。2012年、ドルポで行なわれた12年に一度のシェーの大祭では、「来世を祈る」という言葉が出てきていたが、今回は違っていた。チベット仏教の世界観では輪廻転生、来世、何に生まれ変わるかは現世の行ない次第。しかし、今回は私と同じ近い未来のことで、それがとても印象的だった。

次に、ニサルでの冬の大祭。故・大西保氏が生前言っていた。「厳冬のヤンチェル・ゴンパの大祭は外国人はまだ誰も見ていない」と。それが頭の中に残っていて、ニサルに到着したとき村人に聞いた。「今年は高位の僧侶がカトマンズに帰つたから、大祭はない」と言う。しかし、それがなんと行なわれたのだった。そんな絶妙のタイミングで私はその村に到着したことになる。

早速、お寺に向かって写真を1枚撮影した瞬間、「撮影禁止」と僧侶から注意された。理由を聞くと「神様が怒るから」と。それを言われたら仕方ないと思ってやめたら、祭りに来ているほかの村人たちがスマートフォンで撮影している、矛盾していると思った。

確か2016年のドルポ横断時
も、このニサルでは印象が悪かつ
た。初日の祭りが終わった夜、宿
泊していた家の人にそれを話すと、
その僧侶はなんと彼女の父親だつ
たようで、話をしてくれた。する
と、想像もしてなかったことを言
われた。私たちを泥棒かスパイと
思っていたと言う。数年前にお寺
の仏像が盗まれたことがあって、
それ以来、外国人を警戒している
ようだ。なるほど、それを聞いて
私は納得した。誤解が解けた次の
日、暗れて撮影許可が下り、いろ
いろな話をしてくれた。

この冬の冬祭に至るまでの僧侶
の準備は、1ヶ月以上前から瞑想
の日々を過ごし、さらに本番のお
寺のプジャ、そして、ロサル(お正
月)に入る。ロサルのプジャは、一
軒ずつ回り、各2時間ぐらいプジ
ャをしていた。これらを一気に全
部こなすには、かなりの体力と精
神力が要るものと想像させられ、
凄い世界観を見せていただいた
と思います、感謝せずにはいられな
かった。

すべての原点がここにある

次に印象に残っているのは、彼

らの日常生活である。それは毎月
ある満月のプジャ、越冬している
9割の女性たちがやっていた伝統
的な機織り、キャラバン生活、ヤ
クやヤギの放牧、巡礼、冬の道、雪
豹、再会……、挙げていったらき
りがない。

ここでは、小さな修行僧が雪の
中、水汲みを行なっていたときの
ことを紹介したい。吹雪いている
中、家畜を連れて急な坂を降りて
いく。私はもう完全に心を持って
いかれた。これが日常なのか？
23kg入るタンクを担いで谷へと消
えていった。見ると新雪の中、ヤ
ギと馬を先に行かせて、道ができ
てから彼が後に続いて行つた。つ
まり、動物にラッセルをさせてい
るということだった。私は哑然と
した。こんな幼い少年が独りで……
その後、待っていると水を汲
んで登ってくるのが見えた。小さ
な体だけど一歩ずつ頼もしく、安
定した登りだった。なんて強いん
だろう。こんな幼いときからこれ
が普通の生活だとは。ドルポの人
たちの強さを垣間見た瞬間だった。
最後にお伝えしたいのは、ドル
ポの昔の道が消えつつあること。
私のような旅人にとってはそのだ

エゴでしかないが、でも、先人が
歩いてきた道が消えるのは非常に
悲しい。聞くと、道路建設は賛成
と反対、意見は様々だった。道路
ができることで便利になるように
見えるが、今までの仕事がなく
なる。生活は一変するだろうね、と
不安の声はすでに上がっていた。
これからまたそこで生き抜くため
に、彼らも変わるしかないだろう。
何もかもある便利な日本に生まれ
育った私にとって、ドルポは想像
力を掻き立てられる場所である。
どう変わっていくのだろうか、と
ても興味深い。

村人には「冬に長期で何しに
来た？ 寒いだけで何もないよ」と



極寒の中で行なわれる五体投地の行

言われていて、私が「ドルポが大好き
だから、冬の生活を見に来た」と
伝えてもらっても、信じてくれな
かった。「この厳しい生活の何が
いいんだ？」と言われる。でも「す
べての原点がここにある」と彼ら
に伝えたい。太陽と月、祈りと
ともに、自然と共存しているドルポ
の人たちから教わることは、山ほ
どあった。越冬期間は100日を
超え、ここでは語り切れないほど
毎日が充実していた。

本稿に続いて『山岳』2020年
(第百十五年)では、今までの西ネ
パールの踏破記録も含めて詳細を
発表予定。

(日本ヒマラヤ協会会員)



絶妙のタイミングで撮影できたニサルの冬の冬祭

支部長が代わりました

埼玉支部 大山光一さん

このたび埼玉支部長を仰せつかることになりました。日本山岳会の入会は1972年10月です。

私の山歩きは10代後半から始まり、岩壁登攀や冬山登山を重ね、1973年、埼玉県山岳連盟アラスカ登山隊に24歳で参加、マッキンリー（現・デナリ、6194m）に登頂。74年も埼玉県山岳連盟カラコルム登山隊に参加、未踏ルートから挑んだハラモシユ（7406m）は敗退。

その後、結婚を機に登山活動から離れ、25年余りの空白を経て50歳で登山を再開。家族を抱えたサラリーマンが、仕事と家庭の両立を図りながら、7大陸の最高峰を目指した「登山10年計画」は、2007年のチョモランマ（8848m）登頂で達成できました。



埼玉支部長 大山光一さん

そして定年退職後、09年、チョ・オユー（8201m）登頂、11年、マナスル（8163m）登頂、12年、ネパール側から再びエベレストに登頂しました。

7大陸の最高峰やヒマラヤの高所登山で学んだのは、可能性は自分の中にあり、答えは実践の中にある、ということでした。

埼玉支部は2010年4月に発足、支部会員の英知を結集して各委員会の諸活動を展開し、創設10年を迎えました。5月30日に予定していた10周年記念行事は、新型コロナウイルスによる感染拡大防止のための活動自粛要請で延期とし、年内実施を模索しています。

5月25日、政府は新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言の全面解除を発表しましたが、根本的な感染症対策もなく、新たな視点で山の登り方や滞在方法を考える必要があります。

埼玉支部も会員の高齢化、指導者不足の諸問題を抱え、いかに魅力ある支部活動を構築していくべきか、課題は山積していますが、先輩会員の指導をいただき、次代への継承を主眼に全力で取り組んでいきたいと思っています。

山梨支部 北原孝浩さん

本年4月の支部総会において、

歴史ある山梨支部の支部長に選任されました。通常の支部活動に加え、創立120周年記念事業「日本列島古道踏査」の態勢づくりを急ぎ、活動に着手していく予定です。

登山を始めたのは63年前、高校2年生のときで、ゴールデンウィークに増富から瑞牆山、金峰山、大弛峠への単独行でした。大学時代は米穀は配給制度下、山小屋での食事は米持参という時代でした。卒業記念として計画していた前穂高岳・北尾根を1963（昭和38）年10月に登りました。

社会人としての大半は経済の高度成長期のまっただ中で、持ち出し外貨が自由化されて、海外の山へ行く人も現われてきました。私は長期休暇を簡単にとれる状況はなく、日帰り登山や週末の1泊



山梨支部長 北原孝浩さん

山行、そして、夏休みや正月休みを利用して複数泊の山を楽しんでいました。

縁あって北岳と北穂高岳には足繁く通いました。特に北岳には大正11年の5月に初めて登り、爾来昨年8月までに計56回登っています。特に1966年12月暮れの単独行は、その厳しさを鮮明に記憶しており、今でも心に残る思い出の山行の一つになっています。

さて、当支部では新型コロナウイルス感染防止のため今年度の事業計画を見直し、当面9月までの支部山行を中止にしました。2015年から毎年、秋季3ヶ月間開催の「やまなし登山基礎講座」の実施、および日本列島古道踏査などを通じて、活力ある支部づくりを進めたいと思っています。また、新しい仲間や若い世代にも目を向けてもらえる、魅力ある活動を模索していきたいと思っています。そして、自然災害や環境変化で高山域に生育息する植物やライチョウ、昆虫などが減少、絶滅に追い込まれています。山梨県山岳連盟と連携して、かけがえのない自然を守るための活動に取り組んでいきたいと考えております。

支部長が代わりました

山陰支部 白根 一さん

このたび前支部長・中井俊一氏急逝の後を受けて支部長に就任いたしました。中井氏の前任を務めており、再登板となりました。

山陰には名峰大山がありますが、学生時代は四季を通じてこの山を中心に活動し、先輩方の指導を受けました。大学卒業後は、先輩の多かつた整形外科に入局しました。

幸運なことに第14次南極地域観測隊員に選ばれ、教室の理解を得て、1年余りの越冬生活を経験できました。この隊の雪水プロジェクトに随行して「やまと山脈」の調査旅行に参加でき、雪原に突出した露岩と雪と風の織り成す自然の造形作品の美しさ、厳しさに感嘆しました。主目的は氷の流れる速度の調査でしたが、やまと山脈の山々を測量する作業もあり、正確



山陰支部長 白根 一さん

な地図作りの実際に関わることができました。

また、日独登山交流会に参加する機会もありました。日本から5名、ドイツからは4名の交流隊員の参加があり、ミュンヘンに集合し、ドイツの最高峰・ツークシュピッツェやモン・ブランに登りました。1台の乗用車で3週間にわたり独、仏、スイスと巡ったのですが、興味の尽きない山行でした。一方、国内では「親子で登ろう」という親子登山の会があり、10年余り続きました。子どもの成長とともに終了となりましたが、良い活動でした。また、「山峰会」と称する登山愛好会の会長を務め、山陰の山々を150座も楽しく登りましたが、こちらも高齢化とともに解散となりました。

山陰支部は今年70周年を迎え、記念事業を計画進行中です。なんとか記念の年にふさわしい事業を実施しなければ、と責任を感じております。会員の高齢化もありますので、若い方々の支援活動や地域の連携などに活動の輪が広がれば幸いです。また、広島、四国の各支部との交流も大切にしていきたいと考えております。

コロナ禍でイベントが軒並み中止、延期に

この春から大きな社会問題となっている新型コロナウイルス感染症対策のため、本会関連の各種イベントが軒並み中止または延期となっている。

まず4月11・12日の「第8回鳥水祭」。例年どおり小島鳥水の出身地、高松市・峰山公園での式典や、翌日に琴平山登山などが予定されていたが、本年はすべて中止となった。

続いて同月26日の「第24回久弥祭」。深田久弥の功績と人となりを広く後世に伝えるため、加賀市・九谷ダム広場(富士写ヶ岳登山口)で開催予定だったが、同じく中止となった。

全国支部懇談会は秋に延期

5月16・17日に宮崎市のANAホリデイ・インリゾート宮崎で開催予定だった「日本山岳会全国支部懇談会」は、10月3・4日に延期となった(ただし、今後のコロナウイルスの感染状況の推移を見て、開催の可否は7月末に決定する)。なお、開催会場および翌日の双石

山登山や日南海岸散策などの催しも、当初の計画どおり行なわれる予定。

ウェストン祭は小規模で開催

今年で74回目を迎える「ウェストン祭」は6月6日、例年どおり上高地・ウェストン広場の碑前で、信濃支部を中心とした関係者だけで式典が催される。一方、恒例となっている徳本峠越えの記念山行は中止となった。

「山の旦」記念全国大会

おおいだ2020は1年延期

8月11・12日、大分県九重町および竹田市で開催予定だった第5回「山の日」記念全国大会も、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、1年延期されることになった。大分大会実行委員会が6月2日、発表した。

同大会は、すでに来年の開催地が山形県と決まっていたが、両県関係者が協議の結果、来年は大分県で、再来年に山形県で開催することになった。

RECOLLECTION

回想のマカルー

—南東稜初登攀から50年を振り返って—

東海支部 尾上昇

1970年5月23日午後7時15分、東海支部マカルー隊の田中元尾崎祐一の2名が、南東稜からマカルー（8481m）の頂に立つ。暮れなずむ四周。エベレストとロートツエが闇の中に沈まんとしている。マカルー南東稜初登攀の瞬間である。

このマカルー南東稜の登攀は、日本のヒマラヤ登山史の1ページを飾るにふさわしい記録であると同時に、日本の登山界に多くのインパクトを与えた登山隊であったと自負している。

あれから50年。改めてこの登山を振り返ってみると、実に密度の高かったことを思い知る。それは登山隊に多くの特徴的な側面が具わっていたことに起因する。

この登山隊の特徴を挙げてみると、次の3点に集約されよう。まずは、ヒマラヤ登山解禁後、最初に許可が下りた登山隊であったこと。次いでマカルー南東稜の初登攀は、ヒマラヤ・バリエーション

時代の幕開けを告げるにふさわしい記録であったこと。そして、斬新な組織運営と原真登攀隊長の強いリーダー・シップの存在である。回想とともに述懐してみたい。

ヒマラヤ登山解禁後、最初の許可

東海支部のマカルー計画は、一度はネパール政府から仮許可を得た1965（昭和40）年春の、ロートツエ・シャール（8400m）を放棄せざるを得なくなったことから始まる。同じときに早稲田大学も日本山岳会を通してロートツエ・シャールを計画していた。ネパールサイドでは東海支部に登山許可が出され、日本側では早大に外貨枠が認められるという「ねじれ現象」が起こった。お互いが優先権を主張して、譲れ譲らぬで大揉めとなる。詰まるところ、その仲介に入った日本山岳会本部が半ば強引に東海支部を引き下からせてしまう。東海支部では、これを「ロートツエ・シャール事件」と称して本部への

不信任を募らせることになる。さらに、マカルーの準備期間中にも一度ならずも二度までも同じような仕打ちを受け、地方支部の悲哀を味あわされている。

ロートツエ・シャールからマカルーに矛先を変える。副支部長の石原國利が急遽、カトマンズに飛んで交渉に当たるが、ひと足遅かった。ネパール政府によるヒマラヤ登山禁止令が発出された後であったのだ。既得権で早大の遠征が実現したのは、実に皮肉であった。

1968年8月、ネパール政府は近々、ヒマラヤ登山を解禁すると発表。満を持していた各国の登山隊が許可を求めてカトマンズに集結する。ところが、ネパール政府は近々と発表しただけで、まだレギュレーションが作成されていないという理由で、どここの隊にも許可を下ろさなかった。各国の登山隊は諦めて、次々と帰国していった。日本山岳会本部主導のエベ



BCから見たマカルー。右手に延びるスカイラインが南東稜。右の鞍部がサウル・コルで、直下にC3を建設

レスト隊も同様であった。

最後まで残って交渉を粘ったのが、東海支部マカルー隊の調査隊であった。隊長の松浦正司は、西独隊が1969年ブレのアンナプルナの許可を取得していたことを知り、その許可した理由を尋ねた。西独隊は、外務大臣がカトマンズまでやって来て直接交渉に当たったから、特別に出したと言う。だとすれば、同じように日本の外務



攻略に30日余りを要したブラック・ジャンダルムの登攀

大臣がカトマンズに来れば許可が出るようになるが、それは不可能だろう。その代わり、在日日本大使が外務省の指示で表に立てば、同じ状況が生まれる。こう判断した松浦は、外務省を動かせ、と命じてきた。

時は急を要する。外務省の窓口に掲け合っても、門前払いを食うだけで無駄である。渉外担当の原と尾上は頭を抱えた。半ば諦め半分で、もう1年計画延期か、という考えが頭の中を過る。そのとき尾上が、ある隊員の父親が超大物代議士の後援会の幹部であったことを思い出した。このルートで外務省を動かせないか……。

この電撃的な目論見は、見事に功を奏した。それまで我々に見向

きもしなかった大使館が許可取得に動き、ついに1969年プレの調査隊と1970年プレの本隊の登山許可証を手に入れた。これを契機に、各国の登山隊に次々と許可が下り、JAC本部のエベレスト隊にも許可が下りた。松浦の功績は計り知れないと言ってよい。

ヒマラヤ・バリエーション時代の幕開けを告げる

当時のヒマラヤ登山は、ジャイアンツも含めて高峰の初登頂がひととおり終わり、次の課題であるバリエーション時代を迎えようとしていた。この東海支部のマカルーは、その先鞭をつけた登山だったと言つてよい。そして、その記録は内外の登山界から高い評価を得ている。

マカルー登山は、キャラバンから頂上に立つまで、苦勞と苦闘の連続であった。4000人を超すポーターによる吹雪のシブトン峠越えは、隊を窮地に陥れた。お陰でBC入りが予定より1週間も遅れた。1日休養しただけで、南東稜に突き上げるアイス・フォールに取り付く。

前年の調査隊による偵察の甲斐もあって、キャンプは順調に延びる。南東稜上のC3の建設は、登攀開始からわずか8日目であった。行程の遅れを一气に取り戻す。隊員の間には「4月中旬に登頂も」との楽観論が飛び交う。しかし、そうは問屋が卸さぬのとえどおり、南東稜は牙をむく。稜線上にそびえるブラック・ジャンダルムと呼ばれた岩峰は、岩登りに手練れの猛者連中の執拗な攻撃もことごとく撥ね返した。

ブラック・ジャンダルムを攻略してC5を建設するまでに要した日数は、30日を超えた。その先のアイム・チェアーと呼んだ8000mの長い稜線にもてこずる。アタック・キャンプがやつと建設されたが、予定を大幅に超えていた。食糧も燃料も酸素も底を突いた。残

った物資の全量をハイキャンプに上げ、最後のチャンスに賭ける。

最初の頂上攻撃は失敗した。アタックの2名は、直上目前で日没のため断念。しかも、天候悪化で8300m地点での着の身着のまのビバークを強いられる。雪目と凍傷を負いながら翌日の夕刻、ふらふらの状態で最終キャンプに戻る。BCでは、3日間行方が知れなかったことから遭難と判断、計画断念を念頭に日本へ急報に走る手立てまで講じていた。

この2名の救出劇のため、前夜ほとんど睡眠の取れていないまま午前2時、田中、尾崎は頂上に向かう。本当のラスト・チャンスであった。両名は26時間の連続行動でマカルーの頂を墜とし、翌日の夜明け前にC6に帰着する。余りにもこの超人的な行動に、一部の登山家からは登頂を危ぶむ声も聞かれた。本来であれば頂上の写真が証明するのだが、頂上直前でカメラが凍ってしまい、シャッターが切れなくなっていた。そのとき撮影された、千切れたフィルムが残っている。

登頂は翌年、西稜から登ったフランス隊によって明らかにされた。

頂上に打ち込んだピッケルにくくり付けられていた日章旗を、フランス隊が持ち帰ったのである。このことで噂は消えた。

マカルー南東稜の成功を耳にしたヒラリーは、「あの南東稜を日本人が登るとは……」と語ったという。ヒラリー自身、南東稜に挑んで敗退しているのだ。また、ヒラリーは、併せて1970年のヒマラヤ登山のベストスリーを挙げている。東海支部のマカルーと後の2つは、クリス・ボントンのアンナプルナ南壁と、オーストリア隊のローツェ・シャルルである。

東海支部のマカルーは、当初の計画は南東稜から北西稜（フランス隊の初登頂ルート）への縦断であった。最終的に南東稜一本に絞ったが、余りにも計画が大きくなり過ぎ、無理と判断したためである。むしろ南東稜に絞ったのは、正解であったと言えよう。仮にであるが、縦断計画を実施していたら、恐らく途中で南東稜を放棄して、北西稜だけの登頂で終わっていた可能性が高い。マカルーの第2登という、なんの変哲もない登山となっただろう。

JAC本部のエベレスト隊がそ

うである。南壁（南西壁）を途中で放棄し、通常ルートからの第6登という、平凡な記録に終わってしまった。放棄させられた南壁隊の隊員の悔しさは、想像に難くない。登頂の5月11日以降のおよそ2週間、クーンブ・エリアの天候は、モンスーン直前の安定期に入っていたからなおさらである。

斬新な組織運営と

原真のリーダー・シップ

マカルー隊は、計画全体を一大プロジェクトとしてとらえていた。そして、この目的遂行に欠かせない組織運営に、様々な斬新な手法やアイデアを採用している。

課題の検討は、全員によるブレイン・ストーミング（複数人が自由に意見を述べ合って、問題解決に結び付ける発想法）を行ない、それをKJ法（本会会員で文化人類学者の故川喜田二郎氏が考案した、データをまとめるための手法）で集約する。日程や行程の管理は、PERT図（プロジェクトの工程管理を定量的、科学的に行なう手法）を活用した。

また、集会の前にはプロの指導で歌を合唱する。二部合唱をマス

ターする。トレーニングも、通常のランニングのほかに日本拳法や剣道をやった。日本拳法は、年齢の分け隔てなく闘争心むき出しで殴り合うのである。剣道は防具と場所に関わりがあるので1回でやめた。歌や日本拳法は、ストレスの解消と闘争心を養うのに役立ったと言える。

マカルー隊が、隊の組織運営にこうした斬新な手法やユニークな企画を取り入れたのは、原真のリーダー・シップと企画力に負うところが大きい。原は、計画の段階からオルガナイザーとして隊を引っ張ってきっていた。現場でも実質的な隊長として指揮を執り、強いリーダー・シップを発揮した。

原は「先鋭的」という言葉をよく使った。山登りは理論も実践も急進的で、革新的でなくてはならないと言う。原のこの言動は、同じベクトルで行動しようとする者に、強い目的意識と連帯感を育ませたのである。マカルー隊は、次第に原を中心とする強い絆で結ばれたマカルーの頂を目指す戦闘集団と化していった。それは原が初めから意図していたものなのか、自然に醸成されていったものなのかは

分らない。今はそれを確かめる術がないからである。

東海支部設立の動機が、この地域からのヒマラヤ登山（海外登山）の実現にあったことから、私はこれを「創始の志」と表している。マカルー登山は、その「志」を決定付けるにふさわしい存在だったと言える。以降、東海支部が送り出した海外登山隊の数は、30を超える。今もその「志」は、脈々と受け継がれている。日本山岳会のユニークな支部としての光彩を、いつまでも放っていてくれることを心から願ってやまない。

（元会長、東海支部常任評議員）



アタック中に凍って千切れたフィルム。遠景はローツェとエベレスト（右）

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

志村烏嶺忘れ得べき

小原茂延

志村烏嶺、本名は寛といひ栃木県那須郡烏山町出身。生まれたのは明治7年2月というから、小島烏水、木暮理太郎とほぼ同年代の人である。小島の号である烏水は兄事した滝澤秋暁の諫めから、小島自身が己への戒めを以て名乗ったのであるが、志村の場合は故郷烏山の山嶺に感謝する発想から出たものようだ。少年時代のことを回顧して、戦後間もない『山と溪谷』誌に以下のように綴っている。

「筆者（志村）の生家は城山より南へ派出せる毘沙門山の東麓にあつて（中略）自分は生来付近の子供と嬉戯することが嫌いで独り春は山林に（中略）遙か北方には那須高原、日光の三山が（中略）今も寸時も忘れることのできぬ故郷の山川、由

し烏山を記念して号を烏嶺としたのである。」

年譜、来歴によると栃木師範などを経て博物学の教員資格を取得して、栃木、茨城、仙台、長野などの旧制中学で博物を講じていた。また、当時稀であつた写真技術を茨城時代に学んでいた。明治37年から飯縄、戸隠から浅間、八ヶ岳に登り、とりわけ明治37年8月の白馬岳登山は、そのアルペンの岩と雪と絢爛たる高山植物に魂を奪われた、と感激している。このときにシロウマオウギ、ヒメウメバチソウの新種を採集している。

近代登山の黎明期、彼の果たした役割は大きい。その発端は前田曙山主宰の園芸雑誌に白馬岳周辺の高山植物に関する報告と杓子岳などの写真を載せたことである。この写真に目を止めたW・ウェストン師が小島烏水を介して頼み、高頭仁兵衛が志村を訪ねて譲つて

もらったという。その写真は明治39年2月、英国山岳会誌『アルパイン・ジャーナル』第23巻に掲載されて、日本アルプスが初めてヨーロッパに紹介されたのである。

山岳会が明治38年に日本博物学会同志会の支会として産声を上げる前、同会の後見者の立場を担った城数馬が、会の運営資金の負担を申し出た高頭仁兵衛の資力と人物調査に赴くべく出掛けようとするのを志村が止め、長野に高頭を呼んで鼎談を持った。会談での志村烏嶺の主張が誠に良い。「いやしくも我が国が英国に倣つて山岳会を樹立しようという大局に、一博物学会同志会の支会とするなど、他者の軒下に安んじるとはもつての他、発行誌の原稿など半分は書いてみせると壮語した」と実に気骨のある発言をしている。結局、会員の確保や世間の情勢が見えず支会としての出発となつたのは周知のとおりで、後年、武田久吉の「軒を貸して母屋を取られた」といった発言を生んだ。

その後も白馬岳は毎年登り、また、高頭らと針ノ木越え立山、燕岳から槍ヶ岳縦走、烏帽子岳、鷲羽岳など当時としては最初期の登

山を行なっており、東北の岩手山、岩木山などにも足を延ばして、『山岳』第2年第3号に「奥の富士（岩手山登攀記）」を発表している。また、前田曙山と共著で『やま』を明治40年に出版している。さらに大正2年には『千山萬岳』を出版した。大正5年には台中中学に赴任した。同11年に帰国、目黒に植物園を経営したこともあり、同12年の関東大震災には折から被災した日本山岳会事務所が一時期ではあるが、志村宅に移ったこともある。昭和32年、最後の白馬岳登山ときに82歳であつた。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

医療委員会

コロナ禍と

日帰り登山の注意

コロナ感染症の感染拡大に伴って4月7日に政府から7都府県に緊急事態宣言が発令され、同日、古野会長から登山の自粛が提唱された。5月25日に緊急事態宣言が解除され、今後、感染状況を見ながら段階的に制限が緩和されていくことになる。登山も自粛が緩和されていくと考えられるので、登山再開に当たっての注意点としてアプローチ、感染症対策、ソーシャル・ディスタンスについて考えたい。

まず、アプローチで問題となるのは、感染者の多い地域から感染者の少ない地域へ登山者が移動すること、地元住民を感染させてしまう危険が生じることだ。現在、首都圏1都3県との移動は慎重にとされているが、解除されても、し

ばらくは近郊の山の登山から再開し、地元住民との接触を避けることが必要だ。

感染症対策として3密を避ける

ことが必要なことは言うまでもない。しかし、今回、登山Ⅱ山小屋泊Ⅱ3密という流れが強調され、マスコミと一般の方へ浸透してしまった感がある。実際は登山Ⅱ山小屋泊ではなく、登山の多くは山小屋泊を伴わない日帰り登山で、3密は発生しにくい。登山はそれ自体、屋外活動で、感染のハイリスクになるとは考えにくいので、日帰り登山と山小屋泊登山を分けて考える必要がある。以下、日帰り登山の注意について述べる。

日帰り登山で注意することは街中と変わらない。登山前は、体調が良くない場合は登山を中止する。登山には消毒グッズを携行し、必要に応じて手指の消毒を行なう。なお、コロナに限らず感染の多く

は自分の顔に触れた指からウイルスや細菌が目、鼻、口に侵入することが原因になる。人は1日に数百回、無意識に自分の顔を触っていると考え、自分の顔を触らない習慣を身に付けることが大切だ。

登山中にマスクをしていると呼吸が苦しくなりやすく、熱中症の危険も生じる。熱中症を避けるために屋外では人との距離が2m以上あれば、マスクを外すことが厚労省などにより推奨されている。山中では、混雑時や人とすれ違ふときなど、状況を見て装着すれば良い。呼吸が荒くなるようなピッチで歩くと唾液の飛沫が飛びやすいため、ゆっくり歩く。そのためにもチャレンジングな登山は避け、2グレード程度下げた登山をする。リスクの低い登山は、医療従事者へ負担を掛けない点からも重要だ。

ソーシャル・ディスタンスとして、通常速度(4km/時程度)で歩いている場合は、唾液の飛沫をなるべく浴びないために前の人との間隔を少なくとも2m空ける。速度が速い場合は間隔を長くとの必要がある。また、真後ろにいると飛沫を浴びやすいので、並んだら、斜め後ろにいる方が良い。す

れ違う場合は横方向で1・5m以上の間隔を空ける。山頂などで混雑しやすい場所での休憩は、長い時間とらないようにする。

グループのメンバー数については、スイスでは公共の場で5名を超える人が集まることを禁止しており、これを登山に準用する考えがある。他方、フランスでは登山時の1グループの人数を10名までとしている。フランスの感染者数は人口比で日本の約20倍、死亡者数は60倍(6月6日現在)であり、日本でフランスより人数を少なく制限する理由はないと思われる。メンバー数は原則として10名までとし、それより多い場合はグループを分ける。なお、車での移動は窓を開けて換気に注意する。車内ではマスクをし、人数は定員の半分にすることが望ましい。

登山の空白期間が長引くと、体力と山歩きの勘が低下し、精神的にも鬱を招きやすい。登山道の荒廃も招く可能性がある。いたずらにコロナを恐れることなく、適切な配慮をして登山を楽しんでほしい。山小屋にも1日も早く安全に宿泊できるよう願っている。

(医療委員会委員長 野口いづみ)

寄附金および助成金などの受入報告 (令和2年5月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
鬼村 邦治 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
小口 治 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
荒川 一郎 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
黒木 邦夫 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
岡 義雄 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
城所 邦夫 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
金子 浩 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
北原 周子 会員	20	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
河野 悠二 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
西村 一夫 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
矢野 光行 会員	10	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
少額寄附者 6名	—	東京多摩支部 ザンスカール遠征隊支援
積水ハウス株式会社 山形支店 様	100	「学校から見える山」支部事業支援
株式会社NTORRES 中子敦雄 会員	500	東海支部60周年記念事業
三井 賢治 会員	100	マウンテンカルチャークラブ運営活動 費、120周年記念事業運営活動費

19世紀が終わろうとしていた1



2019年9月
青土社
四六判 435頁
定価2600円＋税

アラスカ探検記

マーク・アダムス著／森夏樹訳



図書紹介

1899年5月、1隻の船がシアトルを出港した。エルダー号という船には自然科学に関する当時のアメリカにおける最高の知性たちと数人の画家、写真家、そしてネチャー・ライティングの分野で最もよく知られていた2人の作家が乗船していた。彼らの目的はインサイド・パッセージを北上し、ア

ラスカの南岸を回り、ベーリング海峡に達して様々な調査を行ない、アラスカに対する知見を深めることだった。作家のうちの1人がアメリカの自然環境保護運動の先駆者、ジョン・ミューアである。エルダー号の航海に先立つこと20年、彼はカヌーでインサイド・パッセージを探検し、グレイシャー・ベイを発見していた。

21世紀に入ってから十数年、ミューアの『アラスカの旅』を書棚から引き出しながらアラスカに出掛けようとしている1人の作家がいた。彼の名はマーク・C・アダムス。本書の著者である。彼はエルダー号が向かった跡をたどってミューアたちが記録に残したものと、今アラスカで起きていることの違いをはっきり目にしたいと思っていた。まずはワシントン州のベリಂಗムからフェリーに乗り込み、インサイド・パッセージに向かう。物語はこの2つの旅が錯綜し、絡み合いながら進行していく。まずはインサイド・パッセージに浮かぶ針葉樹に覆われた島々。著者はそこにたたずむ港町、ケチカンランゲルなどを訪れ、そこに住む人々との会話を通じて、ここ百数

十年の間に起こったこと、エルダー号の時代と今の様子をつぶさに観察していく。

旅は北へ。アラスカ州都のジュノー、ゴールドラッシュがはじけてから100年が過ぎた山師たちの夢の跡、スキヤグウェイ、さらにはフィヨルド最奥の町ヘイーンズを経て、旅のクライマックス、グレイシャー・ベイに向かう。

1750年ごろに最盛期を迎え、ほとんど氷河で埋め尽くされていた広大な湾も、ミューアのころには65km奥まで広がり、今は100km以上奥に行かないと氷河に出会うことができない。ただ、ミューアが「我々は神に出会った」と思わ

「会員に対する優待サービス」対象施設の最新ニュース

「上信越」土合山の家

同山荘に待望の温泉が引かれ、温泉名は「谷川岳温泉・湯吹の湯」（源泉かけ流し）と名付けられました。引湯に伴って宿泊料金が改訂されており、谷川岳の入・下山時には、ぜひご利用いただきましたことです。

ず独白した世界有数の美しい風景は、今も変わらずそこに存在している。

エルダー号の旅を追って、著者の探検はさらに続く。ヤクタット、コードバ、ホーマー、コディアック、ダッチハーバー。その所々でこの100年の間に起こった様々な出来事。クジラ漁やサケ漁の盛衰、大地震、大津波、エクソン・バルディーズ号の座礁による重油の流出、さらにはブルードー・ベイからの石油パイプラインによる石油バブル、地球温暖化の影響など。その間にもそこに住む人々の営みは続き、人の心を変えてしまうほどの大自然は、あるがままでそこにある。

エルダー号の旅はベーリング海峡の東に突き出したスワード半島の先端の町、ポートクラレンスで終わるが、著者はその半島にあるゴールドラッシュの町、ノームに立ち寄り、最後は気候変動の影響で移転を余儀なくされている最果ての町、シシユマレフまで足を延ばす。

フェリーによるインサイド・パッセージのクルージングは、今やアメリカで最も人気がある夏の旅

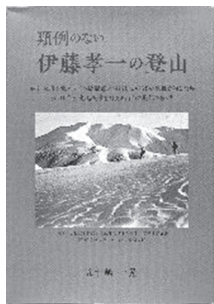
の一つである。スケールの大きさ、息を飲むような美しい風景がそこにあり、旅行く人の臉の裏に一生忘れられないような印象を刻み込むという。ただ、それだけではこの大きなエリアの本当の魅力は分からないだろう。

本書は旅行記でもなく、ガイドブックでもなく、地誌でもなく、小説でもないという、どちら付かすの体裁だが、それだからこそ本書を紐解くと、そういったクルージングの旅だけでは分からないアラスカの魅力が見えてくるように思える。心を揺さぶるようなドラマ性はないが、かえってそこが好ましく、読者にアラスカへの旅心を掻き立ててしまう一冊である。

（近藤雅幸）

五十嶋一晃著

類例のない伊藤孝一の登山



2020年3月
五十嶋商事
A5判 350頁
定価2500円＋税

伊藤孝一の登山を総合的に究明

し、まとめたもので、読み応えのある1冊である。

伊藤は大正期、「雪の立山、針ノ木越え」、「雪の薬師、槍越え」山行を成し遂げ、その全行程を映像に収めた。前者は、雪山の映像として日本最古のものであり、後者では積雪期の上ノ岳・薬師岳初登頂、黒部源流域初踏破、槍ヶ岳への初縦走を達成、安全で快適な山行を実現するために巨額の私財を投じて建てた3つの山小屋などの準備作業を含めて撮影している。

伊藤が足跡を残した山域は、富山県旧大山村出身の著者にとつて故郷の山である。伊藤が建てた山小屋の一つ、上ノ岳小屋はのちに著者の父文一氏が再建、弟の博文氏が経営する太郎平小屋で、再建にも参加したことから「常に伊藤孝一とその登山に関心を持っていた」と記し、労作をまとめた動機を語っている。

本書ではまず2つの山行について、伊藤の日誌や文献などを基に登山記録を書き起こしている。その内容は詳細を極め、著者の執念に驚く。伊藤の四女、都留子氏から掲載を許諾された数々の貴重な写真と詳細な説明が口絵を飾る。

往時の山行状況が分かり大変興味深い。

次に長い間、土蔵に眠っていた伊藤らが撮影したネガフィルムの発見、その後の作品化、上映状況の経緯を詳述している。燦然と輝くその業績が登山史にしばらく現われなかったことについて、伊藤の登山と撮影の動機を考察し、独自の視点からその要因を明らかにしている。また、第三者によつて著わされた、伊藤登山に対する事実と乖離した様々な見解を指摘し、著者の見解を述べている。

日本の山案内組合の歴史に詳しい著者は、その設立についても一章を設けて従来の定説を覆す見解を述べており、一読に値する。

後段でまとめた伊藤孝一の年表は、明治・大正期の登山史に伊藤の年譜を位置付け、近代登山史に精通する著者ならではの一章だ。

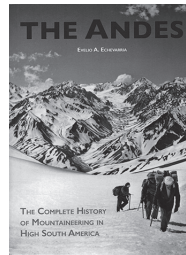
最終章に、伊藤が一括購入した有峰の狢犬8体について、その不思議な魅力にとりつかれたことを記し、その数奇な運命を、記録類を丹念に追い掛けて総合的に解明したことに感服する。

本書は総合的な伊藤孝一探究書の嚆矢といえる。ぜひ読んでいた

だきたい一書だ。なお、本書は「五十嶋商事のネットショップ」で求められる。
(小林敏博)

Evelio A. Echevarria 著

THE ANDES



2018年
Joseph Reidhead & Company
Publishers Augusta, Missouri
in Yosemite, California USA
28.1cm × 21.3cm 827頁
価格 \$64.50

ここ半世紀余り、米国山岳会機関誌「The American Alpine Journal」に目を通している。アンデスの記事あるいは登山情報の中に、この本の著者・エチエベリア氏の名前が毎年出てくるので、相当アンデスに惚れ込んでいる方だと気付いていた。このたび、彼の著書を手にして、まずその大きさと重さに圧倒された。

著者は1926年、サンティアゴ(チリ)生まれ。チリの山から登山を始め65年間、北はベネズエラから南はアルゼンチン、チリに至るアンデス山脈と北アメリカ大陸のロッキーの山々を踏破した登山者であり、現在は米国コロラド州

立大学の名誉教授である。

大きく分類すると、

1・南米大陸そしてアンデスの起源など地球物理学、地質学的解説。
2・石器時代からの考古学的発展史。

3・アンデスに暮らした人々と建造物、焼き物、音楽などの文化。
4・国別・地域別のアンデス山塊の紹介。

5・アンデスの景観を楽しむ、絵画などレジャーの対象とした文化人。

6・スポーツ・アルピニズム対象の山々とアンデスの登山活動。

7・地図、索引、そして初登頂クロニクル。

圧巻は、

①アンデス山脈と各地の山塊名を記した60葉の地図。第1葉にはアンデス各地の登山・旅行シーズンも書かれている。すべて手書きのため見やすく、眺めているだけでも楽しい。

②山名による索引も二十数ページあり、読む側にはありがたい。

③初登頂のクロニクルはベネズエラからチリまでを20の山塊に分類し、3000近い山名と初登頂者名、登頂年月日、出典を記してい

図書受入報告(2020年5月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
西野淑子	もつともつとゆる山歩き : まいにちが山日和	127p/19cm	東京新聞	2020	出版社寄贈
冒険フォーラム運営委員会(編)	新たな自分の発見 : 2019日本冒険フォーラム報告書	112p/21cm	豊岡市・植村直己冒険館	2020	発行者寄贈
日本山岳会静岡支部(編)	不盡 : 日本山岳会静岡支部創立70周年記念誌	123p/26cm	日本山岳会静岡支部	2020	発行者寄贈
日本山岳会東京多摩支部(編)	東京多摩支部 設立10周年記念誌	169p/21cm	日本山岳会東京多摩支部	2020	発行者寄贈
富士山測候所を活用する会(編)	2007-2019年 富士山測候所で行った活動の成果 第13回成果報告書	98p/30cm	富士山測候所を活用する会	2020	発行者寄贈

る。

AJ' AAJ' Alpinism (仏語)・
Revista Peruana de Alpinismo
Peru(スペイン語)・『山岳』など各
国の代表的な25点が主たる原典
だ。これらたくさんの内容を盛り
込んだ「アンデスの百科事典」と言
っても過言ではないだろう。アン
デス関係の書物としては初めての
試みだけに、驚きを隠せない。
アンデスを目指す人や興味のある
方々にとって、今までになかった
重厚な参考書物になることだろう。
(南井英弘)

令和2年度(前期) 海外登山助成金について

新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大に鑑みて、日本山岳会の海外登山助成金の前期募集については、締切日を設定いたしません。海外登山の助成金申請をお考えの方は、個別に事務局にお問い合わせください。ただし、今後の状況によっては募集の中断、助成結果の取り消しをする場合もあります。

日本山岳会事務局 ☒jimukyoku@jac.or.jp

会 務 報 告

令和2年度第2回(5月度)理事会 議事録

日時 令和2年5月15日(金) 19時

00分〜21時00分

場所 オンライン

【出席者】古野会長、野澤・山本・

坂井各副会長、永田・古川

各常務理事、安井・清水・

飯田・柏・近藤・清登、各

理事、石川監事

【欠席者】萩原常務理事・神尾理事、

黒川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和2年度通常総会開催につ

いて審議した。プラザエフにて、限

定出席(理事、監事、議事録署名人

など)にて開催。インターネット中

継。懇親会中止(賛成12名、反対0

名)(永田)

2・第1・2号議案令和元年度事

業報告・決算報告(案)について審

議した。(賛成12名、反対0名)(永

田、古川)

3・第3号議案定款施行細則改定

(案)について審議した。(賛成12

名、反対0名)(永田)

4・支部長の交代について審議し

た。(賛成12名、反対0名)(永田)

【協議事項】

1・新型コロナウイルス感染にお

ける対応について協議し、山岳4

団体でメッセージを出すことにな

った。(古野、永田)

2・組織図と海外登山助成審査委

員会について協議した。(永田)

【報告事項】

1・入会の承認について報告があ

った。(古野)

2・寄附金の受入報告(東京多摩

支部ザンスカール登山隊宛)12件

について報告があった。(古川)

3・医療委員会担当理事を神尾理

事に代わって古野会長が代行する
旨、報告があった。(古野)

4・山研運営委員会の業務の報告

があった。(安井)

5・登山届について報告があった。

(山本)

6・自然保護委員会のSDGs

(持続可能な開発目標)への取り

組みについて報告があった。(飯

田)

7・4日間にわたるオンライン講

習会(「はじめての山登り」「山の

救急医療」「基礎の地図読み」と、

2回の報告会(「日本ジャルキャ・

ヒマール登山隊2020」(海外

登山助成金対象)「東ネパール登

山隊2020」(創立120周年

記念事業)について報告があった。

(永田、柏)

8・会報「山」について報告があっ

た。(節田)

【その他】

1・山梨県からの協力要請

ルーム日誌
5月

ご利用はありませんでした

5月来室者 10名

会報「山」の目録について

会報「山」は付録として50号ごとに目録を付けていますが、現在、851号から900号までのものを作成中で、8月には完成の予定です。前回から、印刷経費と発送料を削減するため、記事データのみを作成し、印刷は会員各自で行なっていただくことにしました。従来どおり紙での印刷を希望される会員には、事務局にハガキかFAX (03-3261-4441)、✉(jimukyoku@jac.or.jp)などいずれかの方法で、9月までに申し込んでください。新たに見積りを取り、印刷・発送の実費は徴収させていただきます。

また、この目録と会報を併せて製本することもお引き受けします。会報851号～900号までの製本をご希望の方は、9月末までに現本を事務局までお送りください。

1・製本業者は前回(2016年)と同じです。

- ① 全面同色(ブルーグレー)ハードカバー
- ② 背表紙にタイトルと会員番号を印字
- ③ 索引は巻頭綴り

2・欠号分は各号150円で補充可能ですが、在庫がない場合はコピー代用となります。

3・製本費用は梱包と返送費用を含めて4000円です。ルーム受取りの場合には500円引きですので、その旨をお書き添えください。製本代金は、書籍発送時(11月末ごろ)に振込み用紙を同送します。

4・過去の会報についてもお引き受けします。

ご不明な点は事務局までお問合せください。

(会報編集委員会、図書室・田村)

会員異動

永田好行(3730)	19・12・29
山崎雄一(12150)	20・1・9
成瀬昌基(12387)	19・5・16
杉本興治(13400)	20・2・4
大竹正徳(14608)	20・5・26
小池隆男(15736)	19・10・26
退会	
織田沢美知子(4983)	神奈川
音石康一(7370)	岩手

藤本信昭(8406)	関西
山田昭一(9292)	京都・滋賀
渡辺健二(9356)	福島
上田景子(10416)	栃木
梶原照子(10896)	
清水秀紀(11933)	福井
佐々木耕二(11994)	福岡
森川茂樹(12066)	神奈川
森川葉子(12067)	神奈川
稲葉英樹(12157)	富山
南波克行(12985)	埼玉

訂正

会報3月号(898)14ページ「東西南北」欄で、武井真澄(ますみ)の振り仮名は武井真澄(しんちゅう)の誤りです。お詫びして訂正します。

◎山研利用受付開始のお知らせ

7月15日より利用開始、6月22日より予約受付を開始いたします。ご利用の詳細は、HPをご覧ください。

予約受付 ☎0263-95125

✉ sanken@po.mcci.or.jp

◆編集後記◆

●コロナ禍が大部分火になつてきたとはいえ、まだまだ安心できません。当初は「コロナ・ビールを飲んで消毒しているから、大丈夫だよ」などと冗談を飛ばしていたのですが、肝心のメキシコのグループ・モデル社が、政府の要請に従って生産を停止してしまいました。可哀そうに、ネーミングが不運だったということでしょうか。

●コロナも厄介ですが、上高地の群発地震も、どちらも正体が見えないだけに対策が難しいですね。1998年にも3ヶ月間ほど同じように発生していますが、遠く離れた剣沢小屋にいても、夜中にドンと突き上げられて、思わず飛び起きたことを覚えています。まさにダブルパンチのダメージで、今年の夏山が心配です。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 901号

2020年(令和2年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重彰
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社